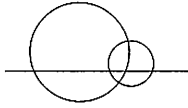


〔若手研究者発表会〕

〔論文〕



「大旅行」記録からみた20世紀前半期の内蒙古の地域像

愛知大学東亜同文書院大学記念センター リサーチ・アシスタント 高木秀和

Ⅰ はじめに

本稿は、600 コース以上⁽¹⁾ におよぶ東亜同文書院生が行った「大旅行」のうち、1900 年代から 1920 年代に内蒙古を踏査した書院生たちの記録を読みすすめ、その記述内容から地域情報を抽出するとともに、それをもとに地図化を試みた。

筆者は 2006 年の愛知大学国際中国学研究センター（以下、ICCS）環境班調査に調査補助員として参加する機会に恵まれ、内蒙古のフフホト（旧、帰化城）とその郊外の大草原、包頭とともに東北三省などを訪れ、この地域の様子を見聞することができた。この年はオープンリサーチセンター（以下、ORC）初年度であり、愛知大学創立 60 周年の年でもあった。60 周年企画の一つとして刊行された『東亜同文書院大旅行誌』（以下、「大旅行誌」）⁽²⁾ を読むと、筆者らの巡検コースとほぼ同じルートを巡った書院生の記録「晋蒙隊旅行記」（書院第 6 期生、1908 年調査）を見つけることができた。

そこで筆者は、ほぼ同年代の学生がほぼ同地域を巡検した際の記録を検討し、書院生がどのような観点や関心からこの地域を記録したか、そして約 100 年という時間がこの地域をどのように変容させたかを明らかにしようと考えた。後述するように、「晋蒙隊旅行記」以外にも似たようなルートをとった「大旅行」記録があることがわかった

が、書院生たちが内蒙古（とくに中西部）を「大旅行」したのはほぼ 1920 年代までであり、それ以降の記録は数少なくなる。また、言うまでもなく東亜同文書院大学は終戦とともに閉学となったので、それ以降「大旅行」調査は行われていない。したがって 1930 年代以降の内蒙古（とくに中西部）の地域像は、「大旅行」記録以外の資史料を多用しなければ検討することができない。そのような背景があり、本稿では 1900 年代から 1920 年代の東亜同文書院生たちの手による「大旅行誌」を素材に、内蒙古の地域像を明らかにする。なお、1930 年代以降の地域像は、別稿で検討したい。

ところで、これまで藤田佳久は地理学の視点から「大旅行」記録を分析し、その内容の検討と意義をいくつかの論考や著作にまとめており⁽³⁾、ORC プロジェクト開始以降はさらにその研究を蓄積した。たとえば、藤田は自身によるこれまでの「大旅行」研究の成果を用いて、その意義や価値をまとめているし⁽⁴⁾、個別的には「農地開発」という観点からおもに満州事変以前の満州の地域像を「大旅行」記録から明らかにしたり⁽⁵⁾、満州国成立直前に松花江沿岸の 10 都市を調査した「大旅行」記録を用いて、人口と事業所数などから都市システムを解明した⁽⁶⁾。さらに、ICCS 環境班調査のうち環青海湖地域の「大旅行」記録と、書院生のなかで唯一この地域を「大旅行」した書院生の記録から、この地域の地域像とその変容を考察している⁽⁷⁾。その他、ORC 事業には直接関



係しないが、ICCS 環境班の調査で訪れた山西省における土地利用などの地域的特徴を、書院生たちの「大旅行」記録と比較した研究もある⁽⁸⁾。

また、曉敏は内蒙古のフルンボイルを巡検した書院生たちの手による「大旅行誌」と調査報告書をいくつか読みすすめ、それらの特徴と意義を考察し⁽⁹⁾、森久男とウルジトクトフは、旅程のなかで一部でも内蒙古地域に足を踏み入れた書院生の「大旅行」記録を時期別に整理した⁽¹⁰⁾。

筆者も、前述したように1908年に「大旅行」を行った「晋蒙隊」と、1910年にほぼ同じルートを巡った「甘肅額爾多斯班」が記した「大旅行誌」を比較し、包頭・帰化城（フフホト）間とその周辺の地域的特徴と2つの作品の間にみられる相違を検討した⁽¹¹⁾。さらに対象地域の幅を広げるため、内蒙古東部（満州を含む）を似たルートで「大旅行」した15期生（1917年調査）と18期生（1920年調査）の「大旅行誌」から、地域的特徴を整理したのち、土地条件、主食や言語に関する情報を拾い出して地図化した⁽¹²⁾。

本稿は、筆者が発表した3篇の小文の内容をまとめ、一部で言及はみられるものの「大旅行」研究の蓄積が多くない、20世紀前半期における内蒙古中西部と東部（満州を含む）の地域像を明らかにする。その際、第1表の「大旅行」を分析対象とした。なお、本稿は2011年1月に開催された若手研究者発表会で報告した内容を整理したもので、筆者のORC事業の総まとめでもある。

II 「大旅行」の概要と初期（拡大期）の「大旅行」の目的

具体的な検討に入る前に、まず藤田（2000）⁽¹³⁾を用いて、「大旅行」の概要を整理する。

書院生による「大旅行」は、1907年に第5期生により始められ、第42期生が調査を行った1944年まで続き、前述したように総コース数は600以上にのぼる。「大旅行」の調査範囲は、中国はもとより東南アジアをも広くカバーしており、大規模かつ組織的な、世界でも類をみない海外調査である。このようなスケールの大きさもさることながら、客観的視点により当時の中国や東南アジアを記録したという点では史料的に評価されてよく、中央からの視点ではなく書院生自らの足で全国各地をくまなく踏査したという点では、当時の中国や東南アジアの姿を伝える生々しい記録であるといえる。

前述したように、「大旅行」は20世紀前半期の激動の時代に行われ、時局に大きく左右された。藤田（2000）は、「大旅行」を大きく5期に時期区分し、それぞれの時期の特徴を述べている。すなわち、「大旅行」前夜である第1期生から第4期生までを「模索期」とし、第5期生から第16期生を「拡大期」、第17期生から第28期生を「円熟期」、第29期生から第37期生を「制約期」、第38期生から第42期生を「消滅期」とした。以下、藤田（2000）をもとに、それぞれの時期の「大旅行」の特徴を簡単に整理する。

第1表 本稿で用いる「大旅行」記録の概要

タイトル（期別）	大旅行実施年	ルート沿いの主要都市
「晋蒙隊旅行記」（6期）	1908年	張家口 → 帰化城 → 包頭 → 帰化城 → 大同 → 張家口
「甘肅額爾多斯班記」（8期）	1910年	洛陽 → 西安 → 寧夏府 → 包頭 → 帰化城 → 張家口
「内蒙古の旅」（15期）	1917年	長春 → 洮南 → 遼源（鄭家屯） → 開魯 → 赤峯 → 熱河
「興安騎行」（18期）	1920年	遼源（鄭家屯） → 洮南 → 林西 → 赤峯 → 熱河

資料：各「大旅行誌」より作成。

まず「模索期」(1901 年～1906 年)の調査旅行は、修学旅行的色彩が強いとしながらも、一部の書院生が 2 ヶ月にわたり湖南地方を旅行したり、長江一帯の飢餓調査に派遣されたケースもみられた。また、第 2 期生の林出賢次郎ほか 4 名が外務省委託で西域や蒙古の調査に従事した。林出らの実績が外務省に評価され、東亜同文書院に調査旅行補助費が支給された。

「拡大期」(1907 年～1919 年)は、「大旅行」が第 5 期生により始められ、それを第 6 期生以降も継承するようになると、コースが四方八方に広がるように、「大旅行」が拡大的に発展する時期にあたる。当初は前述の外務省の補助を用いて「大旅行」が行われたが、そのノウハウが蓄積され書院の行事として定着すると、書院はその費用を予算化した。

「円熟期」(1920 年～1931 年)を迎えると、調査目的が明確化し、蒙古「羊毛調査班」(第 18 期生、1920 年調査。あとの分析で用いる。)などのように調査内容が班名やコース名に明示されるようになった。1918 年には第 5 期生の馬場鋏太郎が書院の教授に就任し、経済地理学の立場から書院生の「大旅行」を指導するようになり、アカデミックな色彩が強まった時期でもある。

ところが「制約期」(1932 年～1940 年)を迎えると、「大旅行」コースが日本軍の支配地域に制約された。言うまでもなく、満州事変(1931 年)、上海事変(1932 年)のほか、排日運動の拡大や、のちの盧溝橋事件、第二次上海事変(1937 年)の勃発がその背景にある。「大旅行」の指導者は馬場教授から第 19 期生の小竹文夫教授に交代し、「大旅行」の色彩もアカデミックな内容から地政学的な調査に変化し、日本の満州経営のために多くの情報をもたらしたと考えられる。

「消滅期」(1941 年～1944 年)は、東亜同文書院の大学昇格(1939 年)後の時期にあたり、「大旅行」は指導教授のもと調査がすすめられるというゼミ方式に変化し、内容も専門的かつ時局

を反映したものとなった。しかし、「制約期」以上に「大旅行」コースは制約され、「拡大期」や「円熟期」の「大旅行」とは性格を異にした。

このような「模索期」を含めた調査旅行や「大旅行」の成果は、『支那経済全書』(全 10 巻、1907 年～1908 年)、『支那省別全誌』(全 18 巻、1917 年～1920 年)、『新修支那省別全誌』(全 9 巻、1941 年～1944 年)として刊行された。

ところで、本稿が対象とする「拡大期」の「大旅行」の目的は何であっただろうか。「大旅行」2 回生にあたる第 6 期生の「大旅行誌」である『禹域鴻爪』の「序文」に、「斯くして重き責務と高き希望とを抱きて」⁽¹⁴⁾ というくだりがある。「重き責務」とは、「大旅行」1 回生である第 5 期生が成し遂げた功績を受け継ぐという意味もあろうが、同じく「序文」に「思ふに對清經營の為に生き對清經營の為に死するは我党の素志也。」とあるように、そこには若き書院生たちの清国(当時)や日中関係に懸ける使命感や意気込みなどが込められているように思われる。藤田(2006)が述べるように、「清朝政権が大きく揺らぎ始めていた時期(中略)、混乱と不安定化を増す清朝の政治体制について、それを書院の学生が「大旅行」を通じても肌で感じ、その安定改革方策について意識するようになった」⁽¹⁵⁾ という時代背景もあるだろう。また、本稿で分析に用いる第 6 期生の『禹域鴻爪』のうち「晋蒙隊旅行記」にみられる、「我々は銃取る人にあらず同文の徽章を頂きて両国の親和の為につくす商業学校の生徒なる」というくだりからは、書院生は当時の清国にとって敵ではないこと、アカデミックを志向する大学生ではなく、日中間の貿易を担おうとする商業学校生であることがわかり、当時の「大旅行」と書院生の性格が端的に表現されている。

このような「拡大期」(初期)の「大旅行」の特徴とそこから描き出される地域像を、第 6 期生の「晋蒙隊旅行記」⁽¹⁶⁾ と第 8 期生の「甘肅額爾多斯班記」⁽¹⁷⁾ を素材にみてみよう。

III 内蒙古中西部の地域像

(1) 第6期生「晋蒙隊旅行記」と第8期生「甘肅額爾多斯班記」の概要

前述したように、1908年に「大旅行」に挑んだ書院生はその2回生であり、1回生である第5期生の精神を受け継いだものと思われる。第6期生の「大旅行」コースは、第5期生のそれに比べると大きく拡大し、それぞれ班は異なるが包頭、成都、貴陽、広州まで足を伸ばしている。コース数は11の班と1駐在班からなり、なかでも「晋蒙隊」(第2班)は、内蒙古方面を巡る壮大なスケールの「大旅行」を敢行した。当時、「大旅行誌」は単行本として刊行されず、「大旅行」の記録は「学友会報」に掲載されたが、「晋蒙隊」は2号にわたりそれを掲載している⁽¹⁸⁾。その点、比較的記録の乏しい最初期の「大旅行」の様子を知るためには好適と思われる。

「晋蒙隊」は、1908年7月10日に上海の東亜同文書院を出発し、前出の第1表のコースを辿りながら同年10月24日に帰院した。出発時の班員は8名であり、「理学士出口氏」と「理科大学生豊原氏」も含まれていた。

その目次は以下のとおりである。

経過地方

はしがき

北京より張家口間

(1)西貴市 (2)南口居庸八達嶺

(3)南京蟲と蝸子 (4)雞鳴驛宣化府

張家口

張家口より帰化城

(1)蒙古犬 (2)寒気 (3)マレンチュイ

(4)食事 (5)竹の子先生 (6)移住支那人

(7)宿泊地 (8)朔北の野 (9)車中に眠る

(10)ローマンカトリック (11)ホルスタインの一夜

(12)テント生活 (13)喇嘛教政策及蒙古人の将来

この章立てをみて分かるように、「学友会報」第8号には、帰化城(フフホト)に至るまでの

ルートで見聞した事物が書かれている。

「学友会報」第9号に掲載された、「晋蒙隊旅行記(承前)」の目次は以下のとおりである。承前には、帰化城から帰院までの様子が書かれている。

帰化城

(1)衙門歴訪

(2)アブドル マチーダ君とマホメッド ハルカム君

(3)胡土克圖(括佛) (4)中興棧

帰化城包頭鎮間

(1)青塚 (2)鄂博 (3)土耳其斯坦人

(4)朔北の雨

包頭鎮

帰化城大同府間

(1)穴居 (2)代哈泊畔 (3)豊鎮 (4)入塞

大同府

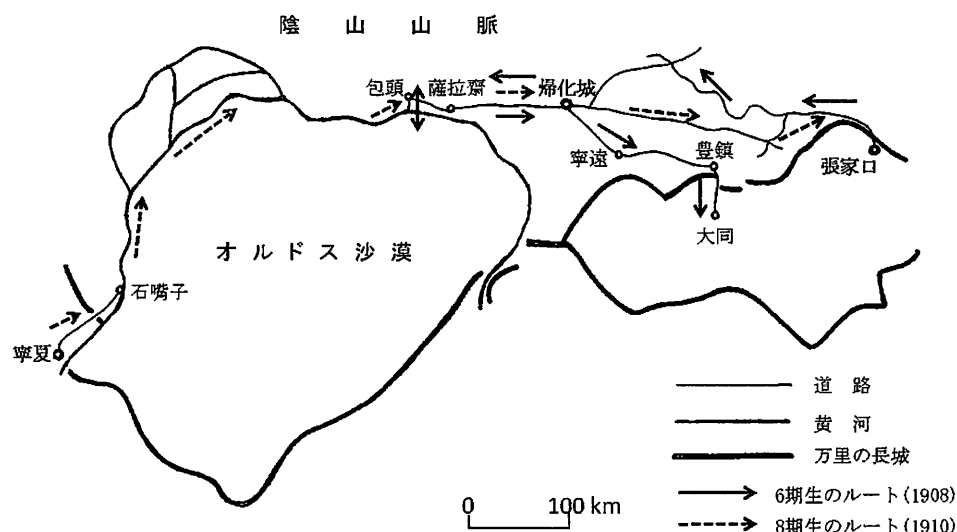
(1)見物 (2)石窟寺

大同府張家口間

附記

具体的な内容の検討はあとで行うことにし、つぎに同時期に似たコースを辿った第8期生の「甘肅額爾多斯班記」の概要を整理する。「甘肅額爾多斯班」は、1919年6月28日に出発し、同年11月8日に帰院した。出発時の班員は5名である。「晋蒙隊旅行記」のように章立てはなされていないが、そのコースを確認すると、第1表からもわかるように、内蒙古のみを「大旅行」したのではなく、洛陽、西安、寧夏府などを経たのち、内蒙古を巡ったものだった。そのうち、寧夏府から張家口までの分量をみると、日数では134日のうち45日(全体の33.6%)、記述では38頁のうち15頁(全体の39.5%)を費やしているに過ぎず、内蒙古とその周辺が中心の「大旅行」ではないことがわかる。

とはいえ、第1図からうかがえるように、両者のコースは似ており、この2つの「大旅行誌」を検討することで、当時の内蒙古中西部の地域像を浮かび上がらせることができる。



第1図 第6期生「晋蒙隊」と第8期生「甘肅額爾多斯班」の「大旅行」コース(一部)

資料：第6期生「晋蒙隊旅行記」および第8期生「甘肅額爾多斯班記」より作成。
注：ただし、帰化城～張家口の正確なルートは不明。

(2) 第6期生「晋蒙隊旅行記」と第8期生「甘肅額爾多斯班記」の比較とそこから読み取れる内蒙古中西部の地域像

そこで、それぞれの「大旅行誌」の記述内容を抽出、分析し、両者の比較を行った。その際、区間毎に整理し、抽出内容を地域情報として把握した。具体的には、抽出内容を、「地形・自然景観」、「気象・気候」、「史跡」、「土着文化」、「外来文化」、「都市経済」、「日本人」、「その他」に分類した。

詳しくは拙稿⁽¹⁹⁾を参照されたいが、第6期生の「晋蒙隊旅行記」ではこれらの項目がまんべんなく記述され、とくに「史跡」では鉄木真(チンギス=ハン)や王昭君などが頻出し、著名な史跡に近づくとその主人公に思いを馳せる傾向にある。一方、第8期生の「甘肅額爾多斯班記」は内蒙古がメインの「大旅行」ではないという性格の違いはあるが、「史跡」や「外来文化」の記述が少なく、「都市経済」に関心を持ち、観察事項や客観的事項を織り交ぜた詩歌を創作している。

このように、ほぼ同じルートを取っているにも関わらず、執筆者の関心事が異なっていて興味深く、同じ地域を巡った書院生たちの記録を順に読みすすめていけば明らかとなる地域情報の幅が広がる

うえに、地域変容も明らかにすることができる。

では、具体的にどのような事物が地域情報として記述されているのだろうか。ここでは、区間毎に「外来文化」と「日本人」を例にみる。

まず、「晋蒙隊旅行記」から「外来文化」に関する地域情報を抽出すると以下ようになる。

北京～張家口：運送業を営む回教徒(土耳其人の子孫)の村

張家口：ロシア人(露清銀行ほか)

張家口～帰化城：移住支那人の開拓と蒙古人の駆逐、キャラバン、ローマカトリック教会と白人宣教師、蒙古人がアヘンを吸引

帰化城：清真大寺のアラビア人、商人宿での交流(天津・庫倫・新疆などの商人、乾葡萄)

帰化城～包頭鎮：英語を話す洋服姿の土耳其斯坦人

帰化城～大同府：プロテスタント宣教師と教会、スウェーデン人宣教師3人と大同府へ

大同府：来日経験のある知府、教会(スウェーデン人宣教師がバイオリンとハンドオルガンで国歌を演奏)

一方、「甘肅額爾多斯班記」には上述の区間の「外来文化」に関する地域情報の記述はないが、参

考までに寧夏府の記述からそれを抽出してみる。

寧夏府：福音堂、西洋婦人と華服、辮髪、華語の主人、40人以上の信者、コーヒービスケット、軍帽をかぶり頭髪は短く赤帯を締めた阿拉善蒙古の一兵士、懐中時計をぶら下げ眼鏡をかけたハイカラな蒙古人

つぎに、「晋蒙隊旅行記」から「日本人」に関する地域情報を抽出する。

北京～張家口：師範学堂に教習柿田氏（宣化府）

張家口：義成洋行（書院2期の石井氏が経営、古橋氏）、三井分行（浦氏）

包頭鎮：天津の売薬商林君

大同府：塚本工学博士と通訳樋口氏

一方、「甘肅額爾多斯班記」から「日本人」に関する地域情報を抽出してみる。

寧夏府：卒業生波多野氏

帰化城：豊鎮より出張の田中佐吉氏（何度も会食）

張家口：義成洋行の石井氏、富岡氏、北京から来た書院1期の内藤氏

また、「地形・自然景観」、「気象・気候」から、日本や上海ではみられない内陸地方ならではの自然を体感した様子や、「土着文化」では「晋蒙隊旅行記」の「喇嘛教政策及蒙古人の将来」などから、蒙古人の気質の変化をうかがい知ることができる。

これらを踏まえ、二つの「大旅行誌」から読み取れる当時の内蒙古中西部の地域像は、以下のよう

- ① 内陸の寒暖差が大きく『「棒の如き雨」』が降るよう
- ② ヨーロッパ系の宣教師や中国各地の商人を中心に、日本人も含めて広域から人々が入り込んでいる状況
- ③ 蒙古人の領域に漢族が入り込み、ラマ教を巧みに利用しながら蒙古人を駆逐し、生活文化を漢化させ、蒙古人からはかつての獐猛さや武勇が感じられなくなった状況

IV 内蒙古東部の地域像—地図化の試み—

(1) 第15期生「内蒙古の旅」と第18期生「興安騎行」の概要

「大旅行」が「拡大期」の後半を迎え、「円熟期」にさしかかると、「大旅行誌」に記述される内容は濃くなり、地域情報から地図化をすることも可能になる。前章では、帰化城から包頭を中心とした内蒙古中西部の地域像を最初期の「大旅行誌」から検討したが、本章では研究対象地域の幅を広げるために、満州を含む内蒙古東部の「大旅行誌」から地域情報を抽出し、地図化を試みる。詳しい内容は、拙稿⁽²⁰⁾を参照されたい。

前述したように、「内蒙古の旅」⁽²¹⁾を記した第15期生の「内蒙古班」は1917年に調査を行い、出発時の班員は5名であった。「内蒙古の旅」が収録された『利渉大川』の巻末には、「内蒙古班旅行経過表」があり、「大旅行誌」本文の記述内容とともに参照すれば地域情報の地図化が可能となる。一方、「興安騎行」⁽²²⁾を記した第18期生の蒙古「羊毛調査班」は1920年に調査を行い、出発時の班員は4名であった。両班が辿ったコースは第1表にまとめたとおり似ており、前章で指摘したように同じ地域を巡った書院生たちの記録を比較しながら読みすすめていけば、明らかとなる地域情報の幅が広がる。

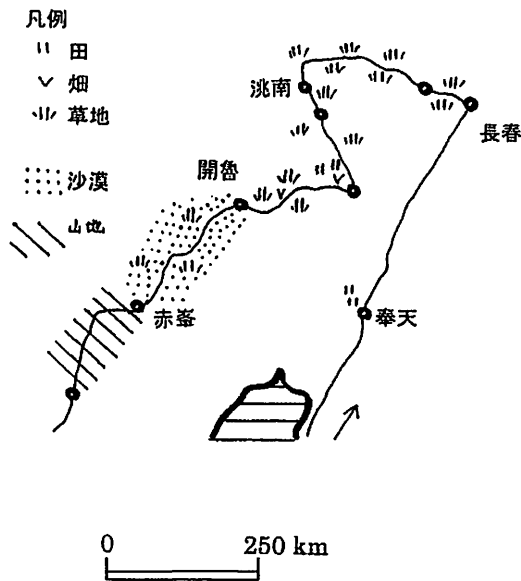
(2) 第15期生「内蒙古の旅」と第18期生「興安騎行」から読み取れる内蒙古東部の土地利用

第15期生の「内蒙古の旅」によると（第2図）、長春から開魯は草原が広がり、都市周辺には耕地もみられた。開魯を過ぎて赤峯まではおおむね沙漠となるが、「沙漠地帯とはいへ時には青々とした草の丘も通る事がある、細い柳にかこまれた涼しい沼を見る事もあるそうした丘と沼には必ず五十位ひから百二百位ひの牛や馬が放牧せられて居る」（231頁）という記述がみられるように、水が溜まりやすい場所には草地が広がり、そのような

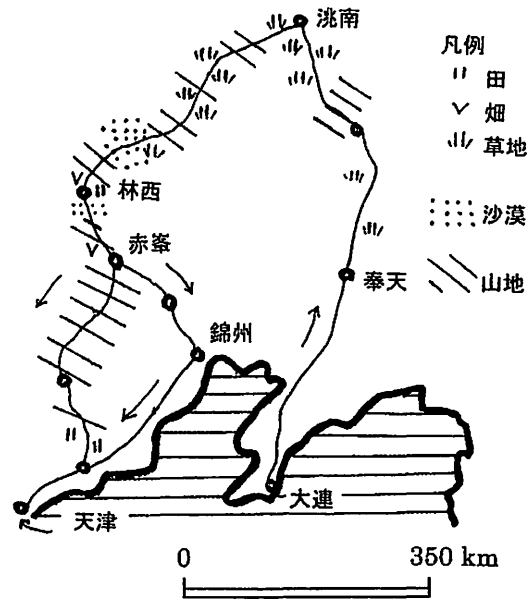
場所で牧畜が営まれている様子がうかがえる。赤峯を過ぎると、「山岳起伏し、「石道多く加ふるに山路急坂沙漠」(235頁)となる。

一方、第18期生の「興安騎行」によると(第3図)、洮南周辺には草地が広がり、それを挟むように山地や丘陵がみられるとしている。洮南か

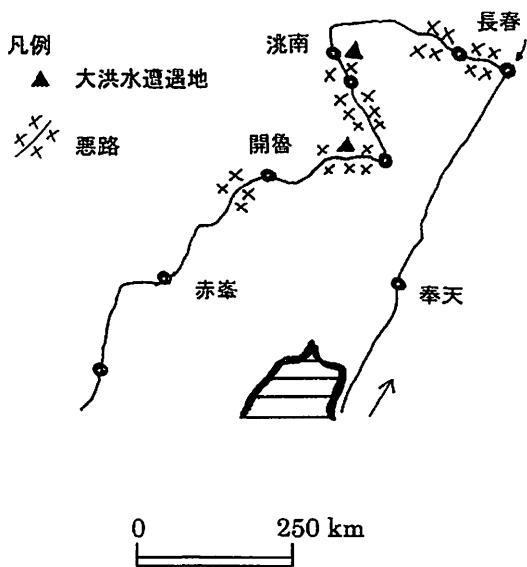
ら林西の間も、交互に草地と山地を繰り返していることが読み取れ、沙漠もみられた。林西や赤峯の都市周辺には耕地が点在し、日本人の薄盆三氏(蒙古産業公司)が経営する水田もみられ、「日本人一名と朝鮮人数十名ありてこの水田並に羊の放牧に当つて居る」(240頁)という。赤峯を過ぎる



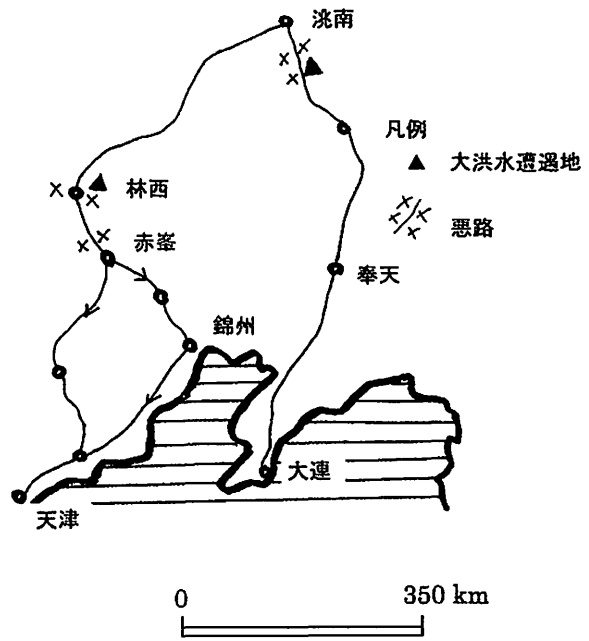
第2図 第15期生「内蒙古班」コース上の土地条件
資料：第15期生「内蒙古の旅」より作成。



第3図 第18期生「内蒙古班」コース上の土地条件
資料：第18期「興安騎行」より作成。



第4図 コース上の悪路と大洪水遭遇地
資料：第15期生「内蒙古の旅」より作成。



第5図 コース上の悪路と大洪水遭遇地
資料：第18期生「興安騎行」より作成。

と山岳地帯となり、滦河と熱河の合流地点から灤縣まで「民船」で川を下った。

つぎに、ルート上の悪路と大洪水について、彼らがそれらに遭遇した場所を第4図と第5図に示した。第2図および第3図と比較しながら両図をみると、おもに草原地帯で洪水や悪路に遭遇していることがわかる。この地域は夏雨地域であり、書院生たちが「大旅行」を行う時期と重なる。そのため、第15期生の「内蒙古の旅」に添付された写真に「行路難」というタイトルが付けられていることに象徴されるように、彼らは大雨に遭遇しながらぬかるんだ草地を苦労しながら進んだ。このような大雨や洪水に遭遇する一方、「元来蒙古人は川の魚を猟れば雨が降らぬと信じて居る。それで魚を取ることは全く厳禁してあつてこの禁を犯すものは蒙古人でも支那人でも死刑に処してしまふ。処が日本人薄氏のみにはこの魚を取つても好いことになつて居る」(「興安騎行」、239頁)という記述がみられるように、日照りや干ばつは大雨や洪水の被害と紙一重であった。

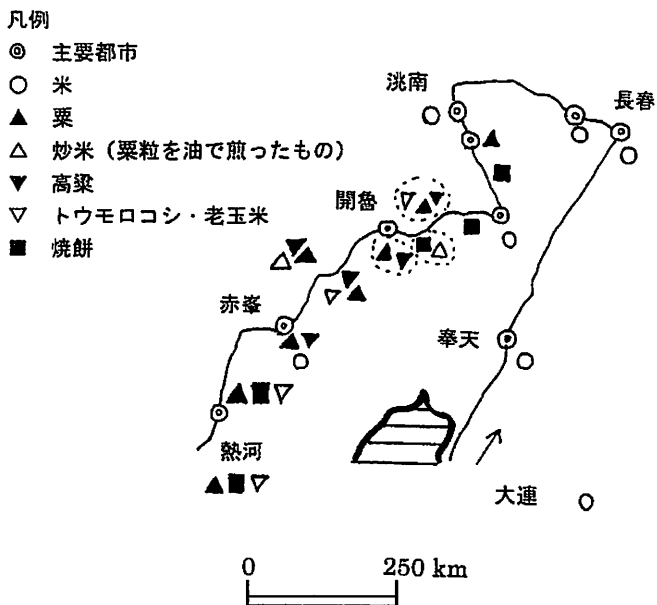
このように、満州を含む内蒙古東部は、草地、沙漠、山岳地帯(山地)と明瞭な地形のコントラストをみせていることがうかがえ、草地では洪水の被害に遭う一方、干ばつの被害に見舞われることもあり、気象条件も両極端であることがわかる。ただし、地域により気象条件は異なるので、両極端な気象条件がみられる地域が紋切型のように等しく広がっているわけではなく、その違いが土地条件のコントラストをつくり出している。

(3) 内蒙古東部の主食と言語

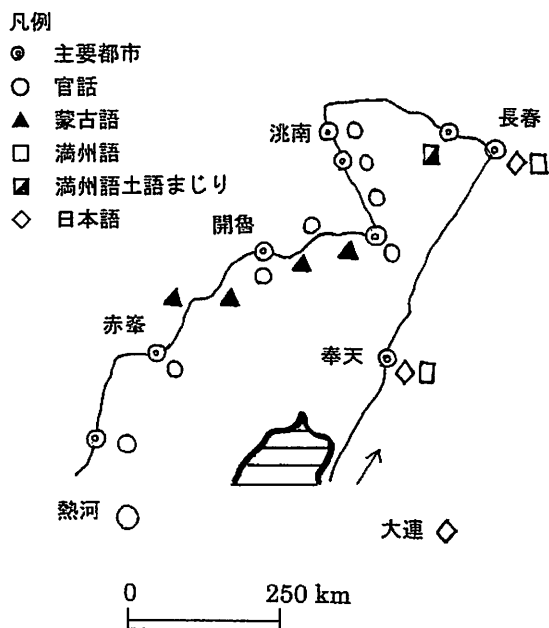
それに関連して、第15期生が編んだ『利涉大川』巻末に収録された「旅行経過表」と「内蒙古の旅」本文の記述内容を用いて、まず主食と土地利用の関係をみる。主食の種類を図示した第6図と「内蒙古の旅」の記述内容によると、生産面では都市周辺で高粱が栽培されていることがわかり、流通面では大連、奉天、長春、洮南、赤峯

(一部)では米が、洮南以南では粟や高粱が消費されていることがわかる。

生産面では、東北大平原は「アジア式畑作農業」地帯で「黒い大地」が広がり、土地条件としては高粱などの作物の栽培に適しているが、前述したように気象条件が不安定であるうえ、ケッペンの



第6図 コース上の主要都市における主食の種類
資料：第15期生「旅行経過表」などより作成。



第7図 コース上の主要都市における言語の種類
資料：第15期生「旅行経過表」などより作成。

気候区分によればこの地域は湿潤大陸性気候 (Dfa-b) に属するために冬季の寒さはとても厳しく、必ずしも農業には適していない。

流通面では、日本人が入り込んだ諸都市⁽²³⁾ を中心に米が消費されている様子がかがえる。前述したように、洮南以南では粟や高粱がおもに消費され、「炒米」という粟粒を油で炒った食品には砂粒が多く入っているため、班員たちは食べるのに相当苦勞している。

つぎに言語の種類をみると、第 7 図のようになる。それによると、都市部を中心にほぼ官話に通じることがわかるが、奉天や長春では満州語も話されており、鄭家屯から赤峯では蒙古語しか通じない地域もみられた。また、日本人が入り込んでいた大連、奉天、長春では日本語も通じた。

これらのことから、官話が侵入して漢化が進行していることがうかがえる。漢族の流入と前述したラマ教の腐敗はまた、蒙古人の気質を変化させたうえに生活を困窮させた。そのことがやがて蒙古人の反漢意識の形成につながったとされ、パプチャップ (バボージャブ、1875 年 - 1916 年) のような反漢蜂起の指導者が生まれた。

以上のように、前章の最後に指摘した内蒙古中西部の地域像は、内蒙古東部にもほぼあてはまることわかる。

V おわりに

本稿は、東亜同文書院生の手による 4 篇の「大旅行誌」を用いて、1900 年代から 1920 年までの内蒙古の地域像を明らかにした。

その結果、内蒙古中西部では書院生たちが変化に富んだ気候とダイナミックな自然を大いに体感したこと、そして蒙古人の漢化による気質の変化とともに日本人商人やヨーロッパ宣教師がこの地域に入り込み、外的な影響を受けていることなどが改めて浮き彫りとなった。

また、ほぼ同じルートを辿った第 6 期生「晋蒙隊旅行記」と第 8 期生「甘肅額爾多斯班記」を比

較しながら読みすすめると、執筆者の関心事が異なっていて興味深く、同じ地域を巡った書院生たちの記録を順に読みすすめていけば明らかとなる地域情報の幅が広がるうえに、地域変容も明らかにすることができることを示唆した。

さらに、「円熟期」にさしかかった「大旅行誌」からは、記述内容の濃さから地域情報をもとに地図化することが可能であり、内蒙古東部を事例に土地利用、主食や言語に関する地図を作成することができた。地図化の作業をとおして、土地利用や主食が「地形・自然景観」、「気象・気候」に適合したものであること、言語からは官話の侵入と漢化、ラマ教の腐敗による蒙古人の気質の変化を読み取ることができ、前述したような地域像は内蒙古東部にもほぼ当てはまることわかった。

最後に、今後の課題を整理するという意味で、若手研究者発表会の席上で質問されたことをまとめておく。愛知大学現代中国学部教授の三好章先生からは、「大旅行」の「調査報告書」の読み込みと関連史料や文献にあたる必要性、dry farming 地域である満州農業史研究の参照、清末から民国初期という難しい時期だが研究を深化させれば興味深い対象であるということ、当時この地域には多種多様な職業の人が混在していたことに注意を払うこと、内蒙古は広いので地域間に大きな違いがあつて一括りに「内蒙古」としにくいこと、地名の読み方を正すこと、ただ事実を列挙するだけでなく「大旅行」の歴史的・社会的意義を提示すること、の諸点が指摘され、元愛知大学教授の別所興一先生からは、満鉄の調査との関連性が指摘された。

今後、時代背景に注意を払いながら関連する文献の収集と史料批判をすすめてつづ、内蒙古の地域的な多様性にも留意しながら「大旅行」研究をすすめていきたい。そのような意味では、「大旅行」研究でも、筆者の専攻分野である地理学と、関連分野である歴史学や社会経済史学の研究 (成果) を融合させる必要があることを感じた。



付記

若手研究者発表会での報告と本稿執筆の機会を与えて下さった藤田佳久先生と、研究会の席上で懇切丁寧なご指導をして下さった三好章先生と別所興一先生に記して謝意を表したい。

文献および注

- (1) 藤田佳久 (2000) : 東亜同文書院学生の中国調査旅行とコースについて、『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(愛知大学文学会叢書 V)、大明堂、pp.282-342。
- (2) 東亜同文書院稿、愛知大学 (2006) : 『東亜同文書院大旅行誌』(オンデマンド版)、全 33 巻+解説 1 巻、雄松堂出版。
- (3) 前掲 (1) の著書のほかに、以下の論文がある。藤田佳久 (1998) : 東亜同文書院の中国調査旅行と書院生の描いた中国像、『季刊地理学』50-4、東北地理学会、pp.273-286。藤田佳久 (1998) : 東亜同文書院の中国研究—書院生の中国調査旅行を中心に—(20 世紀における日本の中国研究と中国認識 9)、『中国研究月報』52-10、中国研究所、pp.17-49。藤田佳久 (2006) : 東亜同文書院生の中国調査「大旅行」について、『大倉山論集』52、大倉精神文化研究所、pp.153-196。
- (4) 藤田佳久 (2007) : 『愛知大学東亜同文書院ブックレット③ 東亜同文書院生が記録した近代中国』、あるむ、61p.。藤田佳久 (2009) : 第八十五回午さん交流会—東亜同文書院から愛知大学設立への歩み—～東亜同文書院生の「大旅行」調査を中心に～、『東三河懇話会会報誌 MIKAWA NAVI』41、東三河懇話会、pp.16-17。藤田佳久 (2009) : 東亜同文書院の歩みと中国「大調査旅行」について、『JINA Bulletin』33、pp.46-48。Fujita Yoshihisa (2010) : The development of Toa-Dodun-Shoin College at Shanghai from 1901 to 1945, and their great trips for regional researches on China、『Proceedings of the 14th International Conference of Historical Geographers』、Kyoto University Press、pp.125-126。
- (5) 藤田佳久 (2008) : 東亜同文書院生の記録からみた 20 世紀初期の満州における農地開発に関する研究、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』2、pp.225-248。
- (6) 藤田佳久 (2010) : 東亜同文書院生による満洲大調査旅行記録のうち「松花江沿岸都市調査」について、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』4、pp.261-290。
- (7) 藤田佳久 (2009) : 東亜同文書院生が記録した 90 年前の中国・青海の地域像、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』3、pp.339-354。
- (8) 藤田佳久 (2005) : 中国山西省の土地利用変化—100 年前の東亜同文書院生の記録との比較から—、『2004 年度人口生態環境問題研究会中間報告書 中国における環境問題の現状』、愛知大学国際中国学研究センター、pp.321-334。
- (9) 暁敏 (2008) : 書院生のフルンボイルにおける調査旅行、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』2、pp.279-284。暁敏 (2009) : 書院生によるフルンボイルに関する調査報告書について、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』3、pp.363-366。
- (10) 森久男・ウルジトクトフ (2010) : 東亜同文書院の内モンゴル調査旅行、『紀要』136、愛知大学国際問題研究所、pp.141-165。
- (11) 高木秀和 (2007) : 内モンゴルで日本人学生は何を見たか—東亜同文書院第 6 期生が記録した内モンゴルと現代の日本人学生が見聞した内モンゴル自治区について—、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』1、pp.109-124。高木秀和 (2008) : 東亜同文書院生による「大旅行誌」を用いた 20 世紀初頭の寧夏・内モンゴルの地誌的研究—第 8 期生「甘肅額爾多斯班記」をもとに—、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』2、pp.285-294。
- (12) 高木秀和 (2009) : 東亜同文書院生が記録した 1910 年代の内モンゴル東部の地域像、『愛知大学東亜同文書院大学記念センター オープン・リサーチ・センター年報』3、pp.379-405。
- (13) 本章の「大旅行」の概要の部分は、前掲 (1) による。
- (14) 前掲 (2)、序文、『禹域鴻爪』(東亜同文書院大旅行誌 2)、p.29。
- (15) 前掲 (3)、藤田 (2006)。
- (16) 前掲 (2)、晋蒙隊旅行記、晋蒙隊旅行記 (承前)、『禹域鴻爪』(東亜同文書院大旅行誌 2)。
- (17) 前掲 (2)、甘肅額爾多斯班記、『旅行記念誌』(東亜同文書院大旅行誌 4)。
- (18) 玉生武四郎 (1909) : 晋蒙隊旅行記、『学友会報』8、pp.89-110。玉生武四郎 (1909) : 晋蒙隊旅行記 (承前)、『学友会報』9、pp.75-87。なお、筆者の玉生は栃木県出身で、卒業後は国民新聞記者として活躍した。
- (19) 前掲 (11)。
- (20) 前掲 (12)。
- (21) 前掲 (2)、内モンゴルの旅、『利涉大川』(東亜同文書院大旅行誌 11)。
- (22) 前掲 (2)、興安騎行、『粵射龍游』(東亜同文書院大旅行誌 13)。
- (23) 太平洋戦争研究会 (2010) : 日本人が住んだ街、『図説 写真で見る満州全史』、河出書房新社、pp.113-152。